

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 8 月 7 日現在

機関番号：32617

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2016

課題番号：23520566

研究課題名(和文) データベース構築に基づく明恵関係聞書類の記述的研究

研究課題名(英文) Descriptive Study of Records for lectures by Myoue(1173-1232) of Kamakura period based on database creation.

研究代表者

土井 光祐 (Doi, Kouyuu)

駒澤大学・文学部・教授

研究者番号：20260391

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、「解脱門義聴集記」を対象とする大規模なデータベースを構築し、その言語的性格を解明することを企図したものである。本資料の内部構造は極めて複雑であり、本文の解読、漢字字体と漢字音の処理、他典籍からの引用部分(漢文)の総索引化の方法等に課題が残っているが、本データベースの構築により、鎌倉時代の聞書類の総合的な記述的研究が可能となりつつある。

本資料は、明恵の口頭言語を記録するために生じた書記言語の規範の弛緩と、鎌倉時代の仏書の注釈書が一般的に持つ古代語以来の書記言語規範の束縛という、二つの性格を複雑に混在させた、独特の文体的性格を有していることがより明確となった。

研究成果の概要(英文)： In this research, the author tried to elucidate the character as Japanese language history of this source by constructing a large-scale database covering all the components of the Gedatsumongi-choujyuuki (late-time copy of the Kamakura period, the collection of Kanazawa Bunko). Although the internal structure of this material is extremely complicated and difficult to understand, there remain challenges such as deciphering the text, processing of kanji fonts and kanji sounds, method of indexing of citations from other writings (Chinese texts), this database permit comprehensive descriptive research of written preaches in the Kamakura period.

The Gedatsumongi-choujyuuki has a distinctive style which mixes two characteristics; "restriction" of the written language norms that Buddhist commentary texts during the Kamakura period commonly contained since the ancient language and "relaxation" of these norms which occurred when the oral language of Myoue was actually recorded.

研究分野：日本語学

キーワード：中世語 鎌倉時代語 明恵 法談聞書類 高山寺 解脱門義聴集記 金沢文庫 動詞「クセセル」

1. 研究開始当初の背景

口語史の研究を中心として発展してきた日本語史において、鎌倉時代は口語資料の欠乏が著しく、日本語史研究のもっとも立ち遅れた時代とされてきた。口語史を主体とする研究方法を採用する限り、この状況は容易に解決されることはないであろう。一方で、口語的徴証の混入が認められる言語資料で、鎌倉時代に成立、書写されたことが確実な資料の記述的研究が立ち遅れていることも大きな要因となっている。そこで、当該研究の進展のためには、従来より口語的徴証の混入の可能性が高い文献として期待されている鎌倉時代の学僧・明恵上人高弁(1173-1232)に關係する法談聞書類の用例データベースを作成し、それを基盤とした記述的研究を行うことが急務である。

2. 研究の目的

今日に伝存する鎌倉時代成立の法談聞書類は膨大な数に上るが、その多様性は著しく、等質の言語資料として扱うことは全く不可能である。これは明恵關係の法談聞書類においても例外ではない。そこで、先ずは、明恵關係法談聞書類の中で、鎌倉時代に確実に書写年代され、比較的言語量の多く、しかも、口語的徴証の混入が目立つ文献に絞って、用例データベースの構築を行うことを企図した。具体的には、金沢文庫蔵「解脱門義聴集記」全10巻鎌倉時代後期写本(国宝)である。同資料は、明恵法談の中でも特定の原典の注釈を目的とした「講説」に属する聞書類である。原典は明恵自撰の「華嚴脩禪觀照入解脱門義」である。明恵の弟子達によって明恵講の聞書を蒐集した後、原典章句の展開に合わせて、聞書を取捨選択して置き、私注や他典籍の引用文を付加することによって、原典に対する総合的な注釈書に仕立て上げられている。従って、純粋な聞書のみで成立しているわけではない点が特徴の一つである。しかし、聞書部分と後の増補部分とを峻別する文章構成を採っているために、同一資料内で聞書部分と非聞書部分とを言語比較することが可能となり、聞書部分に認められる口語的徴証の具体相を相対的に明らかにし得る好個の特徴を備えている。文章構成の別を用例データベースの情報として付加することは、恐らく初めての試みであろう。

恐らく、「解脱門義聴集記」は、質・量共に鎌倉時代を代表する法談聞書類の一つであって、後代の抄物との比較にも耐え得る稀有の資料的価値を有している。

3. 研究の方法

「解脱門義聴集記」のデータベース化に際しては、用例毎に、内部の文章構成要素のどこに使われたものであるかという情報を付

加することを試みて、聞書の言語的特質を相対的に明確化し得るようにした。具体的には、(a)注釈対象となる原典の章句(見出し)、(b)明恵による講義の聞書部分、(c)喜海による講義の聞書部分、(d)聞書者・編者の私注、(e)他典籍からの引用増補部分、の概ね五種の性格の異なる構成要素から成り立っているが、各漢字、各形態素が上記五種のどの部分の用例であるかがわかるように、電子化テキスト本文上に、上記の構成要素の別を入力した。又、いわゆる文脈表示のために文節単位で区切り符号を入力した。次に、漢字をすべて抽出して、MS-Excelに移植し、本文内の所在、使用された文章構成要素の種類、『大漢和辞典』番号を付加し、当該漢字の使用された文節の前後2~3文節単位で表示する、いわゆるKWIC形式のデータベースの作成を進めた。本資料の本文は極めて複雑かつ難解であるため、本文校訂、漢字字体の判断と処理、他典籍からの引用部分(漢文)の総索引化の必要性の有無等に未だ課題が残っており、検討を続けつつ作業を続行中である。

4. 研究成果

鎌倉時代は口語資料の欠乏が著しく、日本語史研究の最も立ち遅れた時代とされてきた。この中にあって鎌倉時代の学僧である明恵(1178-1232)の講義を弟子が聞書した資料群は、鎌倉時代書写の文献が多く現存し、鎌倉時代の口語的徴証を確実に伝える文献として注目されてきた。特に金沢文庫蔵「解脱門義聴集記」鎌倉後期書写は、言語量が非常に多く、鎌倉時代を代表する聞書類として特に注目に値する。本研究は、「解脱門義聴集記」を対象とする大規模なデータベースを構築し、その言語的性格を解明することを企図したものである。本資料の内部構造は極めて複雑であり、本文の解読、漢字字体と漢字音の処理、他典籍からの引用部分(漢文)の総索引化の方法等に課題が残っているが、本データベースの構築により、鎌倉時代の聞書類の総合的な記述的研究が可能となりつつある。

本資料は、明恵の口頭言語を記録するために生じた書記言語の規範の弛緩と、鎌倉時代の仏書の注釈書が一般的に持つ古代語以来の書記言語規範の束縛という、二つの性格を複雑に混在させた、独特の文体的性格を有していることがより明確となった。

又、「解脱門義聴集記」と類似資料に位置する高山寺蔵「観智記」三帖鎌倉時代中期写本は、明恵が「観智儀軌」を原典として講説を行ったところを弟子が聞書したもので、明恵最晩年の聞書類として注目されるが、言語的特徴としては「解脱門義聴集記」と近似した性格を有している。「観智記」で特に注目されるのは、動詞「クセセル」の用例の発見であって、恐らく鎌倉時代書写本の確例とし

ては新見であろう。従来「クセセル」は「宇治拾遺物語」の一例のみが知られていたが、多くの注釈書が共通して語義不明とし、解釈にも諸説が見られた。「観智記」の「クセセル」は、従来、説かれていた「くせ(曲)」や「音曲」の意味ではなく、「真」に対義する「よしまなこと」「正しくないこと」の意で使用されており、従来通説を覆す新たな用例として特に注目される。勿論これらの言語徴証のみをもって本資料の本文全体の性格を云為することは許されず、鎌倉時代の言語の総体の中で本資料をどのように評価すべきか、方法論的にも課題は多い。とは言え、高山寺経蔵に明恵の法談を基盤とした比較的大部の聞書類が、鎌倉時代書写の一等資料として、右の特徴を伴いつつ伝存している意義は特筆すべきであり、当代の言語徴証の新たな確例を提供する新資料として高い価値を有することは疑いを容れない。

又、聞書類の中には、明恵の著作との連続性を有する資料が存在することが新たに確認された。明恵の言説を類集した聞書類の一つである高山寺蔵「真聞集」鎌倉時代後期写本・全七冊に、明恵自筆の仮名書き撰述書「光明真言土沙勤信記・同別記」とほぼ同じの本文が存在することが新たに発見された。「光明真言土沙勤信記・同別記」は、その編纂目的である「タ、在家ノ信ヲス、ムルアヒタ・假字ニテ・土沙ノ功能ヲ・アラハス・ハカリナリ」との意図、即ち在家の人間にとっての「わかりやすさ」が、内容、表記、表現において、徹底して実現されている撰述書として著名であるが、その淵源には、明恵の口頭の言説の存在することを示唆するものである。この点は、明恵の口頭の言説、それを類集した聞書類、仮名書きの撰述書との間に、連続的な側面を有する場合があることを示している。個々の言語的徴証に対して、国語史的な意義付けを行う際には、旧説に無批判な ad hoc な捉え方をすることに重要な警鐘を鳴らす事例として位置付けられるものであり、特に注意が必要であろう。

明恵関係の聞書類は、鎌倉時代語の一般的な特徴である言語規範の墨守と弛緩の許容とを文語体の成熟の中に多様化させて、個人レベルでは多様な書記言語を柔軟に使いこなし、資料レベルではこれらが程度差を持ちつつ複雑に混在する状況を生むという、極めて重層的な言語体系を如実に反映した資料群を形成していると総括することができる。一方で、そのような一般的な特質を有しながらも、他の資料群に較べると、古代語以来の言語規範の許容に対して遙かに寛容であった場合があったことを認めざるを得ない客観的な言語徴証を示しており、今後はその背景と内実をより詳細に解明していくことが課題となる。

The Kamakura period (1185-1333) is considered as the missing link of historical research on Japanese language due to the lack of materials about spoken language. Contemporary documents which have been written by the disciples of Myoue (1178 - 1232), a scholar monk, on his preaches convey reliable and relevant information on this period. Some contain great linguistic examples "Gedatsumongi-choujuuuki" (late-time copy of the Kamakura period, the collection of Kanazawa Bunko), which are particularly representative for this period.

In this research, the author tried to elucidate the character as Japanese language history of this source by constructing a large-scale database covering all the components of language. Although the internal structure of this material is extremely complicated and difficult to understand, there remain challenges such as deciphering the text, processing of kanji fonts and kanji sounds, method of indexing of citations from other writings (Chinese texts), this database permit comprehensive descriptive research of written preaches in the Kamakura period.

The Gedatsumongi-choujuuuki has a distinctive style which mixes two characteristics; "restriction" of the written language norms that Buddhist commentary texts during the Kamakura period commonly contained since the ancient language and "relaxation" of these norms which occurred when the oral language of Myoue was actually recorded.

5. 主な発表論文等

()

〔雑誌論文〕(計3件)

土井光祐、金水敏、高山寺蔵『観智記 第一』鎌倉時代中期写本・影印並びに略解題、平成28年度高山寺典籍文書総合調査団研究報告論集、査読無、2017、64 118

研究者番号：

(4)研究協力者

()

土井光祐、定真口説・仁真聞書『胎蔵界傳受記 小野』(影印)、平成26年度高山寺典籍文書総合調査団研究報告論集、査読無、2015、43 77

土井光祐、明恵の撰述書と聞書との関係について「真聞集」に見える「光明真言土沙勸信記」草稿逸文をめぐって、訓点語と訓点資料、査読無、127輯、2012、140 156

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

土井 光祐 (Doi, Kouyuu)
駒澤大学・文学部・教授
研究者番号：20260391

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者